

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520554

研究課題名(和文)DVD字幕多言語データベースによる再帰的要素の統語的・語彙的研究

研究課題名(英文)Syntactic and Lexical Study of Reflexives Based on Multilingual DVD Captions Database

研究代表者

長谷川 宏(Hasegawa, Hiroshi)

専修大学・法学部・教授

研究者番号：90208497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：再帰代名詞束縛の分析を行った。Lebeaux、Chomskyが提唱した再帰代名詞の移動分析をミニマリストプログラムの枠組みで捉え直し新たな提案を行ったのがHasegawa(2000)の移動分析であったが、その後のミニマリストプログラムの発展にともない導入されたAGREEのメカニズムをHiraiwaが発展させたMULTIPLE AGREE(多重一致)を再帰代名詞に応用した分析が、Hasegawa(2005;2009)とChomsky(2005;2008)で提案された。本研究はこの移動分析と多重一致分析を融合したhybrid(混成)分析を検討し、その形態論・語形成への応用の可能性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research pursued and extended possible analyses of reflexive binding and their applications. Movement analyses of reflexives, originally proposed by Lebeaux and Chomsky, were reexamined and extended within the minimalist framework in Hasegawa (2000). The mechanism of AGREE was introduced as the minimalist program advanced further, and the mechanism developed into MULTIPLE AGREE proposed by Hiraiwa (2001). Multiple Agree analyses of reflexives were independently proposed by Hasegawa (2005; 2009) and Chomsky (2005; 2008). This research examined the effectiveness of the proposed hybrid analysis, which was an amalgamation of the movement analysis and the Multiple Agree analysis of reflexives. The research was also extended to possible applications of the analysis in morphology/word formation.

研究分野：英語学

キーワード：生成文法 再帰代名詞 束縛

1. 研究開始当初の背景

(1) 再帰代名詞の束縛(reflexive binding)の分析として、従来の束縛理論(Binding theory)に代わって、Lebeaux (1983)、Chomsky (1986)等が提唱した、移動分析(movement analysis)があった。この移動分析を、ミニマリストプログラムの枠組みを用いて発展させたのが、Hasegawa (2000)のL F移動分析であった。これは再帰代名詞のうち、再帰的要素(-self)の部分のみが、代名詞(him)の部分の元の位置に残して、非顕在的(covert)に移動することを論じたものであった。

(2) 一方、ミニマリストプログラムの展開とともに、AGREE (一致)のメカニズムが導入された。Hiraiwa (2001)は、これを発展させ、単一の探索子(Probe)が、複数の目標子(Goal)と一致を起こす、MULTIPLE AGREE (多重一致)という操作を提案した。この多重一致のメカニズムを用いた再帰代名詞の分析を、Hasegawa (2005; 2009)とChomsky (2005; 2008)が、それぞれ独自に提案していた。

2. 研究の目的

(1) Hasegawa (2000)の再帰代名詞L F移動分析と、Hasegawa (2005; 2009)の再帰代名詞多重一致分析を融合させた混成(hybrid)分析が、位相理論(phase theory)などミニマリズムに基づいた統語理論上の観点から、妥当性をもつことを論証するとともに、さまざまなデータの統語分析におけるその有効性を検証した。

(2) さらに、再帰代名詞の混成(hybrid)分析を応用することにより、selfのような再帰的要素を含む派生複合語の、形態論的な性質・語形成の成り立ちがうまく説明できる可能性を、多様なデータを元に明らかにしようとした。

(3) 再帰代名詞の統語的性質と、再帰的要素を含む派生複合語の語彙的・形態的性質を、混成(hybrid)分析に基づいて分析することで、統語部門と語彙・形態部門との相互作用、両者に共通する性質・原理と、それぞれに異なる性質・原理とを解明する

3. 研究の方法

(1) 映画・ドラマ等のDVDソフトウェア、Youtubeなどのインターネット上の動画などから、DVDプレーヤー、ノートパソコン、字幕処理ソフトウェアなどを用いて字幕データ、音声データを収集し、言語データとして利用できるよう、データベースの作成を行った。

(2) また、米国カリフォルニア州南部の、スペイン語との二言語話者であるヒスパニック系住民の英語、カナダのバンクーバー市近辺およびバンクーバー島の、さまざまな民族的背景をもつ人々の英語方言、オーストリアのウィーンで話されているドイツ語方言(バイエルン・オーストリア語)、ハンガリー語等からも、再帰代名詞、再帰的要素を含む、多様な言語データの収集を行い、データベース化した。

(3) 作成した多様な言語データベースの中から、再帰代名詞や、selfなどの再帰的要素を含む派生複合語のデータを抽出して、品詞・形態・用法などに基づいて、分類・整理を行った。そして再帰代名詞の統語的なふるまいを分析するだけでなく、再帰的要素を含む派生複合語の語彙的な性質、語形成のあり方などについても、形態論的観点から、分析・検討を行った。

(4) これらの多様なデータを元に、再帰代名詞の混成(hybrid)分析が、位相理論(phase theory)など、ミニマリストプログラムの枠組みの中で、再帰代名詞の統語的な性質をうまく説明でき、統語分析として有効であることを検証した。

(5) さらに、さまざまなデータに基づいて、selfなどの再帰的要素を含む派生的複合語の形態論的な性質、語形成の成り立ちが、混成(hybrid)分析を応用することで、うまく説明できる可能性を追求した。

4. 研究成果

(1) 再帰代名詞の混成(hybrid)分析によれば、-selfのような再帰的要素の、位相(phase)の左端(left edge)への移動が起こった後、その移動した先の位相(phase)の左端(left edge)の位置で、再帰的要素がGoal(目標子)として機能し、Probe(探索子)との多重一致(MULTIPLE AGREE)を引き起こすと考えられる。

(2) たとえば

(i) John saw a picture of himself
のような文において、himselfのような再帰代名詞は、形態論的に見て、himという代名詞的要素と-selfという再帰的要素が、語形成によって結合したものであると分析することができる。

(3) この-selfという再帰的要素が、再帰代名詞を含む位相(phase)の左端(left edge)まで移動する。

(4) 移動した先の、位相(phase)の左端(left edge)の位置で、この再帰的要素-selfは、

Goal (目標子)として機能し、それより上位にある要素 T(Tense; 時制要素)を Probe(探索子)とする、多重一致(MULTIPLE AGREE)の操作を引き起こす。

(5) このように考えることで、移動の局所性(locality)の問題と、一致(AGREE)の局所性の問題を、同時に解決することが可能になった。

(6) Hasegawa (2000)の移動分析(movement analysis)では、-selfのような再帰的要素が、それを束縛する要素(binder)を指定部(Specifier)としてもつT(Tense; 時制要素)の位置まで、いっきに移動すると考えなければならなかった。この移動が、局所性の条件(locality condition)、具体的には主要部移動条件(Head Movement Constraint; HMC)に違反しているのではないか、という問題があった。

(7) また、Hasegawa (2005; 2009)の多重一致(MULTIPLE AGREE)を用いた分析では、Goal (目標子)として機能する-selfのような再帰的要素と、Probe (探索子)として機能するT(Tense; 時制要素)との関係が、一致の局所性(locality)に違反する可能性があった。具体的には、位相(phase)の境界を超えて、Goal(目標子)である再帰的要素とProbe (探索子)であるT(時制要素)の一致が起こることになり、ミニマリストプログラムにおける局所性の条件(locality condition)である位相不可侵条件(Phase Impenetrability Condition)の違反を生じてしまう可能性があった。

(8) 本研究では、混成(hybrid)分析を採用することにより、(i)のような文においては、まず再帰的要素-selfが再帰代名詞を含む位相(phase)の左端(left edge)へと局所的(local)な移動を起こす。そして移動した先の、位相(phase)の左端(left edge)の位置で、再帰的要素-selfがGoal(目標子)として機能し、Probe(探索子)のT(Tense; 時制要素)と、局所的(local)な一致(AGREE)を起こすと考えられる。移動と一致とが組み合わせられて起こると分析することで、移動と一致のいずれにおいても、局所性の条件(locality condition)が満たされている、と考えることが可能となった。

(9) なお、self-のような再帰的要素を含む、派生的複合語については、名詞・動詞・形容詞等の品詞の違いによって、その形態論的性質、語形成の成り立ちが異なると見ることができる。このような事実も、混成(hybrid)分析を用いて説明することが可能であると考えられる。

(10) また、統語部門と語彙・形態部門とに

観察される性質・作用する原理の異同、および両部門の相関関係・相互作用についても、混成(hybrid)分析を採用することで新たな知見が得られることが見込まれる。しかし、その厳密な論証にはさらなる検討が必要であり、平成 27 年度中にはその研究成果を論文としてまとめ、発表する予定である。

引用文献

Lebeaux, David, A Distributional Difference between Reciprocals and Reflexives. *Linguistic Inquiry* 14, 1983, 723-730.

Chomsky, Noam, *Knowledge of Language*, Praeger, 1986.

Hasegawa, Hiroshi, A Note on Intermediate Traces/Copies and LF Movement of Reflexives, *UCI Working Papers in Linguistics* 6, 2000, 1-16.

Hiraiwa, Ken, Multiple Agree and the Defective Intervention Constraint in Japanese, *The Proceedings of HUMIT 2000*, MITWPL 40, 2001, 67-80.

Hasegawa, Hiroshi, Reflexive Binding as Agreement and its Interactions with the Phase System, *The World of Linguistic Research*, ed. by Noriko Imanishi et al., Kaitakusha, 2005, 53-69.

Hasegawa, Hiroshi, Reflexive Binding as Agreement and its Locality Conditions within the Phase System, *Germanic Languages and Linguistic Universals*, ed. by John Ole Askedal, Ian Roberts, Tomonori Matsushita, and Hiroshi Hasegawa, John Benjamins, 85-105.

Chomsky, Noam, On Phases, *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos Peregrín Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, MIT Press, 133-166.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 宏 (Hasegawa, Hiroshi)

専修大学・法学部・教授

研究者番号：90208497

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：